The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上代から中世末期におけるガ・ノの上接語の通時的変化
Author(s)	後藤, 睦
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2017, 51, p. 43-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71397
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上代から中世末期における ガ・ノの上接語の通時的変化

後 藤　睦

キーワード：ガ・ノ／格／主語標示／連体修飾

1. はじめに

古代日本語においては、以下に示すように、ガとノは主語をあらわす場合［→(1)］にも、連体修飾を示す場合［→(2)］にも、ともに用いられていた。

(1) a. わが思ふ人はありやなしやと（古今）　右近が言はむこと（源氏）
　　b. 人の来たりける時（古今）　袖の朽ちにけるかな（源氏）
(2) a. わが恋　君が手　かれが住みか　人麿が歌　式部がところ
　　b. 衣通姫の流　人の心　蜘蛛のふるまひ　歌の文字　三笠の山

古代日本語におけるガとノは、主語を標示する用法と連体修飾をあらわす用法をともに持っている点、主語標示用法と連体修飾用法ともども上接語の制約があった（野村 1993; 2011）点が特徴である。これらの特徴は、現代日本語（現代京阪方言）へと変化する中で、ガは主語標示用法に、ノは連体修飾用法にそれぞれ専用化[1]していくこと、また上接語の制限が崩壊することで両方とも失われることになる。

本稿では、ガとノの変化の一端として、ガとノの上接語の制限の崩壊に焦点を当ててその変化の記述をおこなう。本稿で示すことは以下の通りである。第2節では先行研究を概観し、本稿での目的を述べる。第3節では定義を示し、第4節では通時的にガとノの上接語の範囲が変化していることを示す。第5

節では上接語の変化について具体例とともに詳述し、第6節をまとめとする。

2. 先行研究と本稿の目的

主語標示・連体修飾の両用法におけるガとノは、これまで主にガとノの上接語の種類によって使い分けられるとされており、その論点には尊卑説と名詞の種類説の2説があった。

まず尊卑説は、古くは顕昭の『古今集注』（12世紀後半）に指摘されるように、その名詞が話者から見て下位である場合はガ、上位である場合はノを用いるという説である。(3)に挙げるように、『古今集注』では、ノは「うるはしうい」うものであり、ガはそれに対して「けたむことば」「さくることば」「なめし」であると述べられる。

(3) はぎがはなは萩の花也。のといふ言葉をがとよめることあり。むめのえをむめがえとよめり。（……）きよみがせきをもうるはしういはゞきよみのせきとこそいふべけれ。これを大旨はけたむことばなり。しづがなどは、さくることばとおぼえたり。おほやけをきみがとよむことは、なめしといふべけれど、うやまふことばによみならはしたり。（『古今集注』巻四［久曾神編（1980: 198-199）より］。傍線は私に付した）

『古今集注』以降も、『宇治拾遺物語』巻第七「播磨守為家の侍佐多の事[2)]」（13世紀ころ）、ロドリゲス『日本大文典[3)]』（17世紀）や冨士谷成章『あゆひ抄[4)]』（18世紀）にもガとノが尊卑に基づいて使い分けられていたとする指摘が見られる。この尊卑説に基づく先行研究も何点かあるものの（青木1952など）、「海賊や敵のような語をも、きまって「の」でうけて」（東郷1968：28）いたり、天皇の用いる一人称代名詞である「朕」や「丸」にガが接しているなど（東辻1992）、尊卑説では説明しがたい用例が確認されており、ガ

とノの違いは尊卑説のみで説明できない点が残る。

次に、野村（1993; 2011）の名詞の種類によってガとノを使い分けるという説がある。野村（2011）は、上代語のガは「人麻呂」のような固有名詞、「我が妻」のような代名詞、「妹が名」「我妹が目」のような代名詞の代用形式の3種につき、この3種以外にはノが用いられると一般化している（野村2011: 75）。また、この分布について、Whitman・柳田（2009）や菊田（2012）はSilverstein（1976）の名詞句階層モデルに一致することを示唆している。

これらの先行研究では、古代日本語のガとノは基本的に上代語を中心に議論されてきた。その一方、歴史的な変化を論じる先行研究は少ない。野村（1993; 2011）で示される古代日本語のガとノの上接語の制限は現代日本語にはないことから、歴史的に衰退するものと考えられる。そこで、どのようにその制限がなくなっていくのかについて調査の余地があるといえる。本稿では、ガとノの変化の一端として、ガとノが取り得る上接語の変化について記述をおこなうこととする。

3. 定義

調査をおこなう際の手続きについて、以下に示す。

3.1 調査対象：主語標示用法と連体修飾用法

4節以降でおこなう調査では、ガとノの上接語の変化について、主語を標示する用法と連体修飾の用法とに分けて示す。なお、比喩・同格の用例は省いている。その際、どのような用例を主語標示用法あるいは連体修飾用法と認定するかについて、以下に示す。

3.1.1 主語を標示するガとノ

本稿では、基本的に動詞述語文（他動詞文・自動詞文）・形容詞述語文を対象とし、調査をおこなった。名詞述語文は対象外とする。

また、本稿においては節タイプおよび焦点の度合いについては区別をおこ

なわず、主文も従属節も特に区別なく扱っている。節タイプや焦点についての調査・検討は今後の課題としたい。

3.1.2　連体修飾を示すガとノ

連体修飾用法のガ・ノは、「NPノNP」あるいは「NPガNP」の形式を対象とした。「昔よりの志」のような格助詞と共起する形式は対象外としている。また、「いざなみのみこと」のような同格の例も対象外とした。

3.2　ガとノの上接語の分類

本稿では、ガとノの上接語の分類のために、表1に示すようなSilverstein（1976）の名詞句階層モデルを導入する。

表1　Silversteinの名詞句階層モデル

←代名詞→			←一般名詞→			
1人称	2人称	3人称	固有名詞	人間名詞	動物名詞	無生物名詞
			親族名詞			

（角田 2009: 41を参照。引用にあたって形式を一部変更）

この階層を用いる理由として、この名詞句階層モデルが野村（2011）の指摘するガとノの分布にほぼ合致していると考えられること、及びWhitman・柳田（2009）や菊田（2012）などの先行研究において古代日本語のガとノがこの名詞句階層に沿って分布することが示唆されていることが挙げられる。先述したように、野村（2011）はガが固有名詞、代名詞、代名詞の代用形式に分布すると述べているが、これは表1に挙げたSilversteinの名詞句階層モデルの左に位置する（「代名詞の代用形式」は「親族名詞」の中の一部を示すものと考えられる）。一方、ノはガ以外の名詞を標示するのであるから、右側に位置する。上記を踏まえ、本稿ではこのモデルにしたがってガとノの上接語の種類分けをおこなうこととする。[5)]

なお、調査にあたっては、名詞句階層モデルにあてはまらない（あてはまりにくい）以下のものを省いた。レ系指示詞を除く指示詞（コ・ソ・アなど）、数詞・数量詞（「一人」「千両」など）、枕詞（「ひさかたの」「しろたへの」

など)、不定詞(「誰」など)、動詞など用言が名詞転成を起こしているもの(「預り」など)。また、地名を構成するガとノ(「鬼界が島/鬼界の島」)についても今回は省いている。

この分類にもとづいたガとノがつく名詞の分類例を以下の表に示す。

表2　名詞句階層モデルを用いた名詞の分類例

代名詞	1人称	わ、あ、われ、われら、わたくし、おれ、それがし、みども
	2人称	きみ、な、なんぢ、そなた、わごぜ、わどの(わとの)、おぬし、そち、わごりょ
	3人称[6]	し、これ、かれ、あれ、きゃつ
一般名詞	固有名詞	佐用姫、少彦名、なりひら、人麻呂、犬君、孔子、荘子、観音、閻魔、融、俊仁、清盛、重盛、西光、祇王、文覚、釈尊
	親族名詞	妹、背子、父、母、親、子、むすこ、妻、婿、倅、舅
	人間名詞	人、人間、海人、男、女、百姓、子供、大将、天皇、主、商人、盗人、法師、使者、漁師、坊主、山伏、鷹匠、僧
	動物名詞	鶯、馬、猿、熊、雉、犬、猫、兎、白鷺、鶏
	無生物名詞 (抽象名詞を含む)	事、梅、小萩、春、夏、秋、冬、歌合、雪、風、雨、空、滝、月、橋、雷、心地、けはひ、声、智恵、罪、涙、太刀、部屋、夜

なお、この分類について2点付言しておきたい。まず、名詞句階層モデルの「代名詞」は、4節以降の記述では、紙幅の関係上、必要な場合を除いて1人称・2人称・3人称を「代名詞」として一括して扱うことにする。また、同じく4節以降の記述においては、この分類の「親族名詞」や「無生物名詞」について、「親族名詞」からは「妹(我妹子)」と「背子(我背子)」を、「無生物名詞」からは「梅」などの植物名詞を分けて示した。後述するが、古代日本語では「親族名詞」や「無生物名詞」であってもガとノが揺れる場合があり、それは「妹・背子」系の名詞や「植物名詞」において特に顕著である。そのため、このような細分類をおこなった。

3.3　調査資料・調査方法

本稿では、上代から中世末期を中心とした歴史的な変化を記述する。それぞれの時代ごとに、当時の口頭語を反映していると考えられる作品を選定し、調査をおこなった。

- 7～8世紀ころ：『万葉集』音仮名表記中心の巻5、15、17、18、20（巻20から防人歌は除く）
- 10～11世紀ころ：『古今和歌集』（古注は除く）、『源氏物語』（桐壺～花宴）
- 13世紀ころ：『宇治拾遺物語』
- 14世紀ころ：覚一本『平家物語』（巻1～6）
- 16世紀ころ：『天草版平家物語』（巻1、2）、『大蔵虎明能狂言集』（『翻刻注解』上巻の脇狂言之類、大名狂言類、聟類山伏類、鬼類小名類。会話文のみ調査）

『古今和歌集』『源氏物語』『宇治拾遺物語』『大蔵虎明能狂言集』の作品群において、「日本語歴史コーパス（CHJ）」を用いて用例を収集した。検索の手順は以下の通り。

①時代・作品について検索対象を指定する。

②キーを未指定とし、後方共起1に「キーから1語」、「語彙素-ガ」あるいは「語彙素-ノ」とし、短単位で検索する。

③エクセルファイルに移したデータについて、キーあるいはキーの語彙素読みでフィルタをかけ、対象外とする用例を省く。

④用例を確認し、キーの名詞が名詞句階層モデルのどの名詞にあてはまるか、主語標示用法・連体修飾用法のどちらになるかについてそれぞれ分類し、タグ付けをおこなう。その際、同格・比喩のノ、名詞述語文の用例を手作業で省く。

4. ガとノの上接語の変化

4.1 主語標示用法のガとノ

まず、主語標示用法のガとノの上接語の変遷を見ていきたい。Silverstein の名詞句階層にもとづいた分布とその変化を下記の表3に示す。まず、ガとノそれぞれの上接語について延べ語数で出した数値に基づいて作成した表を示し、次に異なり語数で作成した表をそれぞれ出している。

表3　主語を標示するガ・ノの上接語の通時的変化

【延べ語数】

		代名詞	固有名詞	親族名詞		人間名詞	動物名詞	無生物名詞	
				妹・背子系	それ以外			植物名詞	植物以外
万葉	ガ	76(100.0%)	3(100.0%)	23(100.0%)	1(100.0%)	9(18.0%)	3(15.8%)	0	1(1.6%)
	ノ	0	0	0	0	41(82.0%)	16(84.2%)	14(100.0%)	62(98.4%)
古今	ガ	33(100.0%)	17(80.9%)	1(100.0%)	1(14.2%)	0	0	0	0
	ノ	0	4(19.1%)	0	6(85.8%)	130(100.0%)	46(100.0%)	43(100.0%)	209(100.0%)
源氏	ガ	17(100.0%)	2(66.6%)	0	0	4(3.0%)	0	0	
	ノ	0	1(33.4%)	0	4(100.0%)	130(97.0%)	4(100.0%)	0	132(100.0%)
宇治	ガ	51(100.0%)	35(92.1%)	0	3(9.6%)	16(4.9%)	0	0	0
	ノ	0	3(7.9%)	0	31(90.4%)	312(95.1%)	47(100.0%)	3(100.0%)	221(100.0%)
覚一平家	ガ	20(90.9%)	72(86.7%)	0	4(80.0%)	46(27.9%)	4(28.5%)	0	6(3.8%)
	ノ	2(9.1%)	11(13.3%)	0	1(20.0%)	119(72.1%)	10(71.5%)	0	153(96.2%)
天草平家	ガ	17(89.4%)	43(76.7%)	0	6(66.6%)	128(71.5%)	8(88.8%)	0	128(66.3%)
	ノ	2(10.6%)	13(23.3%)	0	3(33.4%)	51(28.5%)	1(11.2%)	5(100.0%)	65(33.7%)
虎明狂言	ガ	249(84.7%)	12(80.0%)	0	28(84.8%)	166(56.8%)	33(78.6%)	1(50.0%)	658(85.2%)
	ノ	45(15.3%)	3(20.0%)	0	5(15.2%)	126(43.2%)	9(21.4%)	1(50.0%)	114(14.8%)

※パーセンテージが60%を超えている箇所を網掛けで示した。以下、同様。

【異なり語数】

		代名詞	固有名詞	親族名詞		人間名詞	動物名詞	無生物名詞	
				妹・背子系	それ以外			植物名詞	植物以外
万葉	ガ	5(100.0%)	2(100.0%)	3(100.0%)	1(100.0%)	4(17.4%)	2(16.7%)	0	1(2.4%)
	ノ	0	0	0	0	19(82.6%)	10(83.3%)	3(100.0%)	42(97.6%)
古今	ガ	3(100.0%)	15(83.3%)	1(100.0%)	1(16.7%)	0	0	0	0
	ノ	0	3(16.7%)	0	5(83.3%)	26(100.0%)	14(100.0%)	2(100.0%)	102(100.0%)
源氏	ガ	3(100.0%)	1(50.0%)	0	0	4(8.2%)	0	0	0
	ノ	0	1(50.0%)	0	4(100.0%)	45(91.8%)	4(100.0%)	0	81(100.0%)
宇治	ガ	7(100.0%)	24(85.7%)	1(100.0%)	1(11.2%)	15(13.9%)	0	0	0
	ノ	0	4(14.3%)	0	8(88.8%)	93(86.1%)	20(100.0%)	2(100.0%)	105(100.0%)
覚一平家	ガ	2(66.6%)	55(90.1%)	0	3(75.0%)	44(30.2%)	4(36.4%)	0	5(3.7%)
	ノ	1(33.4%)	6(9.9%)	0	1((25.0%)	102(69.8%)	7(63.6%)	0	132(96.3%)
天草平家	ガ	8(80.0%)	29(78.3%)	0	5(71.4%)	49(66.2%)	7(87.5%)	0	80(61.0%)
	ノ	2(20.0%)	8(21.7%)	0	2(28.6%)	25(33.8%)	1(12.5%)	3(100.0%)	51(38.0%)
虎明狂言	ガ	15(71.4%)	10(76.9%)	0	14(77.7%)	31(52.5%)	18(78.2%)	1(50.0%)	256(78.5%)
	ノ	6(28.6%)	3(23.1%)	0	4(22.3%)	28(47.5%)	5(21.8%)	1(50.0%)	70(21.5%)

この表3からは、まず、上代語から中世前期の『宇治拾遺物語』まではほぼ名詞句階層モデルに沿ってガとノが分布していたことがわかる。すなわち、ガは名詞句階層モデルの左側である代名詞や固有名詞を中心として分布し、ノは妹・背子系以外の親族名詞から無生物名詞にかけての右側にそれぞれ分布している。このことから、野村（1993; 2011）で示されたガとノの分布は名詞句階層モデルに沿った分布と読み替えることができる。

そして、14世紀ころの覚一本『平家物語』以降、この名詞句階層モデルに基づいたガとノの分布は衰退することになる。表3を見ると、覚一本『平家物語』からガが無生物名詞の領域に、ノが人称代名詞の領域に拡大していっていることがわかる。特にガの拡大は顕著であり、16世紀ころの『天草版平家物語』や虎明本狂言資料においては、人間名詞以外のすべての上接語でガが優位になる。なお、ノも代名詞の領域に進出し、上接語を拡大しているものの、ガが主語標示用法として専用化するため、ガよりも上接語の拡大は緩やかであることがいえる。

4.2　連体修飾用法のガとノ

連体修飾用法のガとノの変化を示すと、以下の表4のようになる。

表4　連体修飾を示すガ・ノの上接語の通時的変化
【延べ語数】

		代名詞	固有名詞	親族名詞		人間名詞	動物名詞	無生物名詞	
				妹・背子系	それ以外			植物	植物以外
万葉	ガ	97（100.0%）	0	27（100.0%）	3（50.0%）	8（7.7%）	1（35.0%）	13（18.4%）	1（0.2%）
	ノ	0	0	0	3（50.0%）	96（92.3%）	13（65.0%）	58（81.6%）	568（99.8%）
古今	ガ	138（100.0%）	20（86.9%）	2（100.0%）	2（20.0%）	0	0	3（1.9%）	0
	ノ	0	3（13.1%）	0	8（80.0%）	172（100.0%）	35（100.0%）	163（98.1%）	1137（100.0%）
源氏	ガ	55（100.0%）	4（66.7%）	1（100.0%）	0	2（0.7%）	0	2（5.4%）	1（0.1%）
	ノ	0	2（33.3%）	0	21（100.0%）	286（99.3%）	20（100.0%）	58（96.6%）	1021（99.9%）
宇治	ガ	158（100.0%）	41（65.0%）	0	1（2.1%）	24（5.0%）	0	0	0
	ノ	0	22（35.0%）	0	46（97.9%）	462（95.0%）	78（100.0%）	34（100.0%）	1603（100.0%）
覚一平家	ガ	110（95.6%）	125（50.6%）	0	6（9.7%）	39（7.4%）	1（1.6%）	2（11.2%）	6（0.2%）
	ノ	5（4.4%）	122（49.4%）	0	56（90.3%）	495（92.6%）	63（98.4%）	16（88.8%）	3884（99.8%）
天草平家	ガ	55（91.6%）	41（33.0%）	0	0	6（3.1%）	0	0	2（0.3%）
	ノ	5（8.4%）	83（66.0%）	0	37（100.0%）	188（96.9%）	16（100.0%）	13（100.0%）	955（99.7%）
虎明狂言	ガ	168（67.7%）	19（52.8%）	0	3（7.5%）	16（6.7%）	1（1.6%）	0	1（0.1%）
	ノ	80（32.3%）	17（47.2%）	0	37（92.5%）	223（93.3%）	63（98.4%）	1（100.0%）	1154（99.9%）

【異なり語数】

		代名詞	固有名詞	親族名詞		人間名詞	動物名詞	無生物名詞	
				妹・背子系	それ以外			植物名詞	植物以外
万葉	ガ	5(100.0%)	0	1(100.0%)	1(50.0%)	4(16.0%)	2(22.3%)	5(35.7%)	1(0.6%)
	ノ	0	0	0	1(50.0%)	21(84.0%)	7(77.7%)	9(64.3%)	170(99.4%)
古今	ガ	3(100.0%)	10(76.9%)	1(100.0%)	2(33.4%)	0	0	2(8.0%)	0
	ノ	0	3(23.1%)	0	4(66.6%)	27(100.0%)	11(100.0%)	23(92.0%)	378(100.0%)
源氏	ガ	4(100.0%)	4(66.6%)	1(100.0%)	0	2(2.9%)	0	1(8.1%)	1(0.3%)
	ノ	0	2(33.4%)	0	7(100.0%)	66(97.1%)	12(100.0%)	10(90.9%)	421(99.7%)
宇治	ガ	10(100.0%)	29(64.5%)	0	1(6.7%)	15(12.3%)	0	0	0
	ノ	0	16(35.5%)	0	14(93.3%)	107(87.7%)	32(100.0%)	5(100.0%)	669(100.0%)
覚一平家	ガ	7(70.0%)	98(50.7%)	0	5(26.4%)	21(8.4%)	1(3.4%)	2(25.0%)	5(0.6%)
	ノ	3(30.0%)	95(49.3%)	0	14(73.6%)	231(91.6%)	29(96.6%)	6(75.0%)	886(99.4%)
天草平家	ガ	6(66.6%)	18(34.6%)	0	0	5(7.1%)	0	0	1(0.2%)
	ノ	3(33.4%)	34(65.4%)	0	20(100.0%)	66(92.9%)	9(100.0%)	4(100.0%)	586(99.8%)
虎明狂言	ガ	14(63.6%)	13(48.1%)	0	2(14.3%)	8(11.3%)	1(3.5%)	0	1(0.2%)
	ノ	8(36.4%)	14(51.9%)	0	12(85.7%)	63(88.7%)	28(96.5%)	1(100.0%)	458(99.8%)

この表からは、まず、上代語から13世紀『宇治拾遺物語』までは、主語標示用法のガとノと同様、連体修飾用法のガとノも名詞句階層モデルに沿ってガとノが分布していたことが指摘できる。

なお、ここで「親族名詞」および「無生物名詞」中の「植物名詞」について指摘をおこなっておきたい。野村（1993; 2011）に指摘されるように、親族名詞の「妹・背子」はガをとるが、「母」や「父」といったその他の親族名詞はノをとり、同じ親族名詞であってもガとノが下接する傾向は異なっている。また、表4から読み取れるように、無生物名詞の範疇である植物名詞において、基本的には無生物名詞に下接しないガが植物名詞に下接していることがわかる。なぜ植物名詞にのみガが下接し得るかは不明である。[7)] 本稿では無生物名詞の中の例外として処理し、詳細な検討は今後の課題としたい。

そして、これらの分布は、主語標示用法と同様に覚一本『平家物語』から変化が生じる。まずノについて述べると、ノの上接語は主語標示用法と同様、14世紀ころの覚一本『平家物語』から代名詞の領域に拡大していくことがわかる。そして、16世紀ころの『天草版平家物語』や虎明本狂言資料では、人称代名詞以外のすべての上接語でノが優位になる。その一方、連体修飾用法のガの上接語の拡大はほぼないことが指摘できる。

4.3　主語標示用法・連体修飾用法におけるガ・ノの変化

ここまでの記述から、ガとノの上接語の変化は以下のようにまとめられる。

①8世紀ころ『万葉集』～13世紀ころ『宇治拾遺物語』：ガとノは主語標示用法・連体修飾用法ともに名詞句階層モデルに基づいて分布している。
②14世紀ころ覚一本『平家物語』：主語標示用法のガ、主語標示用法・連体修飾用法のノの上接語が拡大する。この段階では名詞句階層モデルに沿った分布を保持している。
③16世紀ころ『天草版平家物語』：主語標示用法のガがすべての上接語で、連体修飾用法のノが代名詞以外の上接語でそれぞれ主流になり、ガは主語標示用法、ノは連体修飾用法にそれぞれ専用化する。

この変化は、名詞句階層モデルにもとづいて意味的に分布していた[8)] ガとノが、主語標示用法・連体修飾用法それぞれへ専用化していき、統語的に使い分けられるようになる、という歴史的な変化として捉えることができる。

5.　ガ・ノの上接語の拡大：無生物名詞と人称代名詞を中心に

前節において、ガとノの上接語が拡大していく様子を概観してきた。以下、ガとノそれぞれの上接語の拡大について、ガは無生物名詞に、ノは人称代名詞に着目して確認していきたい。

5.1　ガの上接語の拡大：無生物名詞において

まず、ガについて確認していく。表4からも読み取れるように、上代・中古語においてガはもともと無生物名詞にも下接し得ていた。それは表4の内訳にも示しているように、上接語が植物名詞であるものが多く［→(4)］、他の無生物名詞に下接する例は(5)の1例のみである。

⑷　梅が花、しきみが花、なでしこが花、松が枝、梅が下枝、小萩がうへ、小萩がもと

⑸　（……）紅の面の上にいづくゆか皺が来りし（……）（斯和何伎多利斯）（万葉5・806）

この植物名詞を中心として無生物名詞に下接する連体修飾用法のガは、表4に示したように13世紀ころの『宇治拾遺物語』から確認されなくなる。

そして、14世紀に下ると、覚一本『平家物語』から無生物名詞に下接する主語標示用法のガが確認されるようになる。その例を⑹に示す。

⑹　a.　大なる車輪の如くなるほむらが、三町五町をへだてて戌亥のかたへすぢかへに、とびこえ／＼やけゆけば、おそろしな（ン）どもおろかなり。（覚一平家・巻1・内裏炎上）

b.「奏すべき事があ（ッ）て法住寺殿へ参る。やがてこそ参らめ」（覚一平家・巻2・西光被斬）

c.「平家には小松のおほいどのこそ、心もがうに、はかり事もすぐれておはせしか、平家の運命が末になるやらん、こぞの八月薨ぜられぬ。（……）」（覚一平家・巻5・福原院宣）

d.「此程やう／＼にしてしたてられたる御装束も（ッ）て参るほどに、只今男の二三人まうできて、うばひと（ッ）てまかりぬるぞや。今は御装束があらばこそ、御所にもさぶらはせ給はめ。」（覚一平家・巻6・紅葉）

この⑹に挙げた無生物名詞の例は、植物名詞ではなく「こと」や「卒塔婆」といったモノ・コトガラである。このことから、14世紀ころにはガの上接語が無生物へ拡大し、上接語の制限がなくなり、現代日本語の主語標示用法のガに繋がっていくことがわかる。ただし、その一方で、覚一本『平家物語』以降は連体修飾用法のガが無生物名詞に下接する例はほぼなく、上接語の拡

大はないといえる。

5.2　ノの上接語の拡大：代名詞領域において

次に、ノの上接語の拡大について、代名詞に着目して示していく。表3・4から読み取れるように、ノは14世紀ころから代名詞領域に下接し得るようになる。その用例について、主語標示用法の例を(7)に、連体修飾用法の例を(8)にそれぞれ示す。

(7) a.「まことにわごぜのうらむるもことはりなり。」（覚一平家・巻1・祇王）

b.「則我らのまいる御たちはこれで御ざるが、そなたハどれで御ざる」（虎明狂言・脇狂言之類・餅酒）

c.「なふいつもわごりよのおそうもどるによつて、おれまであのやうにしからるる事じや」（虎明狂言・鬼類小名類・文荷）

(8) a.「（……）ともすればわごぜの事のみうらめしくて、往生の素懐をとげん事かなふべしともおぼえず。（……）いまわごぜの出家にくらぶれば、事のかずにもあらざりけり。」（覚一平家・巻1・祇王）

b.「これこそわどのの父、故左馬頭殿のかうべよ。」（覚一平家・巻5・福原院宣）

c.「そなたの出家にくらぶれば、事のかずでもない。」（天草平家・巻1）

d.「いままたそちのたよりにもをとずれのないわ、こうとも言わなんだか？」（天草平家・巻1）

e.「いやわたくしの名をまかぢと申」（虎明狂言・脇狂言之類・三人夫）

f.「去程に某のせがれが、事の外成人致て候ほどに、近日に烏帽子をきせふと存るが、（……）」（虎明狂言・鬼類小名類・かねのね）

ノがどのような代名詞に下接していくかについて、主語標示用法・連体修飾用法を特に区別せずまとめると以下の表5・表6のようになる。○は用例があることを、×は用例がないことを示す。－は当該の人称代名詞にガ・ノが下接する形式が確認されないことを示している。

表5　一人称代名詞に下接するガ・ノの変化

	わ		われら		それがし		わたくし	
	が	の	が	の	が	の	が	の
万葉	○	×	－	－	－	－	－	－
古今	○	×	○	×	－	－	－	－
源氏	○	×	－	－	－	－	－	－
宇治	○	×	○	×	－	－	－	－
覚一平家	○	×	○	○	－	－	－	－
天草平家	○	×	－	－	－	－	－	－
虎明狂言	○	×	○	○	○	○	○	○

表6　二人称代名詞に下接するガ・ノの変化

	きみ		なんぢ		わごぜ		わどの		そち		そなた		わごりょ	
	が	の	が	の	が	の	が	の	が	の	が	の	が	の
万葉	○	×	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
古今	○	×	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
源氏	○	×	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
宇治	－	－	○	×	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
覚一平家	○	×	○	×	○	○	×	○	－	－	－	－	－	－
天草平家	－	－	○	×	○	○	－	－	×	○	×	○	－	－
虎明狂言	－	－	○	×	－	－	－	－	○	○	○	○	○	○

この表から、ノが代名詞に下接できるようになった要因のひとつに、語彙体系の変化を挙げることができるかと考えられる。つまり、ノに下接する人称代名詞は、特に「わごぜ」「わどの」「そち」「そなた」「わごりょ」のように、基本的に前の時代において確認されないものである。ノの上接語の拡大の一要因として、人称代名詞の語彙体系の変化を挙げておきたい。

また、無生物名詞に下接する連体修飾用法のガが拡大しないのは、現代日本語においてガが連体修飾用法としてほぼ生産性を有していないことからも理解されることである。[9] その一方で、現代日本語ではガが主語標示用法としてほぼ専用化しているにもかかわらず、覚一本『平家物語』の段階では代名

詞に下接する主語標示用法のノが確認される。これについては、「君｛が／の｝走ったのを見た」「猫｛が／の｝鳴く声が聞こえる」のような、従属節の動詞述語文におけるガ・ノ交替において主語標示用法が残っているため（金水2011等）、問題とはならないと考える。[10)]

6. まとめと今後の課題

本稿では、ガとノの上接語の変化について、主語標示用法と連体修飾用法にわけて述べた。その結果、主語標示用法・連体修飾用法ともども上代から13世紀ころの中世前期にかけて、名詞句階層モデルに基づいてガとノが分布していたことがわかった。そして、この分布は、14世紀ころの覚一本『平家物語』から、主語標示用法のガ、主語標示用法・連体修飾用法のノの上接語が拡大することで崩壊しはじめる。そして、16世紀ころには主語標示用法のガがすべての上接語で、連体修飾用法のノが代名詞以外の上接語でそれぞれ主流になる。このようにして、ガとノが上接語の種類による意味的な使い分けから、主語標示・連体修飾それぞれの用法に専用化する統語的な使い分けにシフトし、名詞句階層モデルに基づく分布は崩壊することになる。

今後の課題として、まずは尊卑説の検討が挙げられる。本稿ではガとノの分布について、野村（1993; 2011）に基づいて論じたが、尊卑説については紙幅の関係上論じることができていない。ガとノの尊卑説（尊卑の規範意識）と名詞句階層に基づく分布がどのように関連しているのか、今後述べることとしたい。また、ガとノが両用される場合がある固有名詞・人間名詞の位置づけや、ノの主語標示用法およびガの連体修飾用法の衰退についての詳細な検討については稿を改めて論じたい。

その他、古代日本語のガとノがなぜ名詞句階層モデルに従った分布を示すのかということや、他言語における名詞句階層モデルにもとづく分布との共通点や相違点、Dixon（1979）等の名詞句階層モデルの解釈をおこなっている先行研究との関連についても今後の課題である。

［調査資料一覧］

※作品名のあとの（　）内は本稿における略称を示している。

・万葉集（万葉）［8 世紀ころ］：小島憲之・木下正俊・東野治之（校注・訳）（1994）『万葉集②④』新編日本古典文学全集 7、9、小学館。

・古今和歌集（古今）［905］：小沢正夫・松田成穂（校注・訳）（1994）『古今和歌集』新編日本古典文学全集 11、小学館。

・源氏物語（源氏）［11C 前半］：阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（校注・訳）（1994-1996）『源氏物語①』新編日本古典文学全集 20、小学館。

・宇治拾遺物語（宇治）［1250 頃］：小林保治・増古和子（校注・訳）（1996）『宇治拾遺物語』新編日本古典文学全集 50、小学館。

・覚一本平家物語（覚一平家）［13 世紀ころ］：高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦（校注）（1959）『平家物語　上』日本古典文学大系 32、岩波書店。

・天草版平家物語（天草平家）［1592］：江口正弘（1986）『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院。

・虎明本狂言集（虎明狂言）［1642（中世末期の言語を反映しているとされる）］：大塚光信（編）『大蔵虎明能狂言集　翻刻注解（上）』清文堂。

※万葉集の調査には、古典索引刊行会（2009）『萬葉集電子総索引（CD-ROM）』塙書房を用いた。ただし、表記・読み下しは新編日本古典文学全集にもとづく。

※古今和歌集・源氏物語・宇治拾遺物語・虎明本狂言資料の調査には、国立国語研究所（2015）『日本語歴史コーパス』https://chunagon.ninjal.ac.jp/（2017 年 9 月 4 日確認）を用いた。

※用例・引用文中の下線は、特に注釈のない限り私に付したものである。また、引用に際して、読みやすさの便宜のために旧字体を新字体にするなど、本文をあらためた箇所がある。

［参考文献］

青木伶子（1952）「奈良時代に於ける連体助詞「ガ」「ノ」の差異について」『国語と国文学』339、pp.49-56。

池上禎造（1942）「「梅が花」と「梅の花」」澤瀉久孝（編）『万葉雑記』晃文社、pp.93-104。

菊田千春（2012）「上代日本語のガ格について――活格説の問題点」『同志社大学英語英文学研究』89、pp.89-123。

久曾神昇（編）（1980）『日本歌学大系　別巻四』風間書房。

金水敏（2011）「第 3 章　統語論」金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子『シリーズ

日本語史 3　文法史』岩波書店、pp.77-166。
近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房。
佐々木冠（2004）『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版。
土井忠生訳注（1950）『日本大文典』三省堂。
角田太作（2009）『世界の言語と日本語：言語類型論からみた日本語〈改訂版〉』くろしお出版。
土井忠生訳注（1950）『日本大文典』三省堂。
東郷吉男（1968）「平安時代の「の」「が」について――人物をうける場合――」『国語学』75、pp.27-44。
中田祝夫・竹岡正夫（1960）『あゆひ抄新注』風間書房。
野村剛史（1993）「上代のノとガについて（上・下）」『国語国文』62(2)、(3)、pp.1-17、pp.30-49。
野村剛史（2011）『話し言葉の日本史』吉川弘文館。
東辻保和（1992）「延慶本平家物語における連体格助詞「の・が」の用法――人名詞をうける場合――」井上親雄・山内洋一郎（編）『古代語の構造と展開（継承と展開 1）』和泉書院、pp.91-112。
Dixon, R. M. W. (1979) “Ergativity,” *Language* vol. 55, pp.59-138.
Silverstein, Michael (1976) “Hierarchy of features and ergativity” R. M. W. Dixon (eds.) *Australian Institute of Aboriginal Studies*. Canberra: Australian institute of Aboriginal Studies, and New Jersey: Humanities Press, pp.112-171.
Whitman, John・柳田優子（2009）「人称と活格類型――上代日本語の代名詞体系の観点から――」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明（編）『「内」と「外」の言語学』開拓社、pp.175-214。

［注］

1）　ここでいう「専用化」とは、主語標示の場合は主文に出現し得るかどうか、連体修飾の場合は生産性があるかどうかをそれぞれ基準としている。すなわち、主語標示のノは「猫の走った跡」「私の買った本」のように連体節内部において生産性はあるといえるが、主文には出現できない（「*猫の走った」「*私の買った」「*魚の焼けた」）。また、連体修飾のガは現代日本語（共通語）および京阪方言においてほぼ生産性は持たず、「我が家」「わが友」など固定化した表現にしか確認されない。これらのことから、現代日本語においてガは主語標示に、ノは連体修飾にそれぞれ専用化している、と本稿では位置付ける。

2）「われが身は竹の林にあらねどもさたが衣を脱ぎかくるかな　と書きたるを見

て、(……)「目つぶれたる女人かな。ほころび縫ひにやりたれば、ほころびの絶えたる所をば見だにえ見つけずして、『さたの』とこそいふべきに、掛けまくもかしこき守殿だにも、まだこそここらの年月比、まだしか召さね。なぞわ女め、『さたが』といふべき事か。この女人に物習はさん」といひて、(……)」(宇治拾遺物語 7-2)

3) 「(稿者注：ガは) それの接続する名詞が意味する者を卑下する。第一人称に用ゐ、又低い地位の第三人称に用ゐる。従って又、主人が低い身分の召使と話す時にもこれを使ふ。(……) 他人を軽んじ侮る時にも用ゐる。多くはその前にMe(め)かra(ら)かの助辞を挿入する。(稿者注：ノは)関係句の中で第二人称及び第三人称に用ゐるのが普通であって、それ自身ある敬意を含み、或いは少くとも軽蔑する意のない助辞である。」(土井訳注 1955: 501)

4) 「里に、かしづきては「人の」と言ひ、いやしみては「人が」と言ふも、歌には〔の〕とのみ言ふ。」(中田・竹岡 1960: 228)

5) また、この名詞句階層は現代の方言研究においても有効であることが示されている。一例を挙げると、佐々木 (2004) では、茨城県水海道方言の連体修飾構造について、連体修飾助詞の-ngaと-noの分布がSilverstein の名詞句階層に沿って分布することが示されている。佐々木 (2004) によると、水海道方言では階層の左側ほど-ngaを用い、階層の右側ほど-noを用いるという分布を示す(佐々木 2004: 30-31)。このデータが示すように、現代日本語のバリエーションである方言に名詞句階層のモデルは有効であり、これを日本語史に応用することも可能であると考え、Silversteinの名詞句階層モデルを導入した。

6) 3 人称代名詞については、近藤(2000)のレ系指示詞(コレ、ソレ、カレ、アレ)のうち、文脈からみて人を指示していると考えられるものを 3 人称代名詞として分類した。ただし、特に上代語から中古語においてはテキスト中に 3 人称代名詞が出現する頻度が低く、この分類の妥当性については今後検討する必要がある。本稿における 3 人称代名詞の分類はひとまず仮のものとして示す。

7) これについて、たとえば池上(1942)では、『古事記』歌謡や『日本書紀』歌謡のガの上接語の種類が『万葉集』に比べて多いことを根拠として、『万葉集』以前のガの上接語の範囲は広かったが、『万葉集』の時代に至ってそれが狭まったと論じている。つまり、植物名詞に下接するガはこのような前時代の言語状況が化石的に残っているためである、と池上(1942)は解釈している。

8) Silversteinの名詞句階層モデルというものをどのように解釈するかについては従来からさまざまに論じられてきているが (Dixon 1979 等)、本稿では立ち入らないこととする。今後の課題としたい。また、これに関連して、金水敏氏個人談話において、ガとノの分布は意味論的に見た名詞の指示性を反映して

いるという指摘を受けた（金水敏氏p.c., 2017/7/14）。このように捉えるならば、ガとノの歴史的な変化は、名詞の意味的な指示性に基づく分布が、歴史的に統語的な分布に変化したと解釈することも可能であろう。しかし、ガとノの分布を名詞句階層モデル（＝有生性）としてとらえるにしても、名詞の指示性としてとらえるにしても、なぜガとノの名詞の種類による意味的な分布が崩壊し、統語的な使い分けにシフトするのかについての検討が別途必要となろう。今後の課題としたい。

9）たとえば、「我が友」「自由が丘」など現代日本語にも連体修飾用法として使われるガは確認されるが、これは化石的に残っている用法であると考えられ、生産性はないといえる。

10）ただし、なぜノの主語標示用法が保持されないといけなかったのかについては別途考察をおこなう必要がある。つまり、連体修飾用法であればノが発達・専用化してガは衰退するにもかかわらず、主語標示用法ではガが発達して専用化するのと並行してノもその上接語を拡大している、という非対称性についての検討の必要があるが、今後の課題とする。

（大学院博士後期課程学生・日本学術振興会特別研究員（DC））

SUMMARY

Historical Change of Nouns Preceding the Particles -*Ga* and -*No* from Old to Late Middle Japanese

Mutsumi GOTO

In classical Japanese, the particles -*ga* and -*no* are used as either the subject marker or adnominal marker and have limitations in the type of noun they can be used with. In modern Japanese, -*ga* and -*no* are differentiated into subject marker and adnominal marker respectively and also have no restrictions in the type of noun they can be used with.

In this paper I aim to examine the process of historical changes in the types of noun preceding -*ga* and -*no*, focusing in particular on the change from Old to Late Middle Japanese by using Silverstein's nominal hierarchy (Silverstein 1976) for investigation of these changes.

By examining data from Old to Late Middle Japanese, I point out the following facts. First, the distribution of -*ga* and -*no* follows Silverstein's hierarchy until the 13th century. Second, the range of nouns used with subject marker -*ga* and -*no* expanded in the 14th century and subject marker -*ga* was used more frequently than -*no* for almost all types of noun in the 16th century. Third, with adnominal marker -*ga* and -*no*, the range of nouns used with -*no* expanded in the 14th century, and -*no* became the main adnominal marker for almost all types of noun in the 16th century. But the range of nouns used with -*ga* did not expand.

The distinction in the usage of -*ga* and -*no* was originally related to some semantic features of the preceding noun, but later changed to a syntactical distinction in that the usage of -*ga* and -*no* were more commonly used as subject and adnominal markers respectively.